



野小 熊 橋 項
 糸
 子 織 坂 慶 羽

此本他人所蔵
 不おもふに
 お守り也
 孝次郎
 梅子名法をく

特別
 子12
 3643
 12(10)





門 子 12
號 3499
卷 10



項羽

詠めらるる 死すまじく 宿
可もよと 奪む 是の鳥は乃
錦邊の 草刈る 日暮
月今 家路に 依り 依
錦乃 小萩原の 賣ま 鳥は
草刈ら たる 心あり

故
梅若誠太郎氏
昭和四年五月廿日
梅若重八氏
寄贈

理非

花をりらるも思日あま出産あは
 夜もあはれもたれをたれと
 虫の音もたれをたれと心あはれ
 便船をまらむらへいらるる
 て作 感苦道あめらうて
 僧寺よりきり紅塔聲のりり

鳴あはれまき心まき
 面白りり秋の野あはれ船
 の夜もあはれ秋のあはれ露
 花もあはれ船のあはれ
 花もあはれあはれあはれ
 花もあはれあはれあはれ
 花もあはれあはれあはれ
 花もあはれあはれあはれ

作し其為みこと其ひらく上宅
て入り行らる柳尔女事と
遷居そいふ也居るいよせりて
別の子細
柳の家さくもらじ社是ほと多
き事死とあといもいふり候
まぬそ荒れこも行まじく
もなすくらくはけ集まて候り

御まゝに
さし置たり中い何とし
石を作そいせんとは義人
車とよく出入有死き候
荒面うろち美人まよと行と
たふいせられさるそ是頃羽
の者もきささく人乃が

まじらざる運命ありしをいふと

あはれ一足もゆるぎなき時頃の

あはれもよりの馬より志づきせ

たかりていふに召する音も首を

てする祖の御方なりやとよみ

をいふも名馬を思ひて出づ

るに不覚成者の心なりしをいふ

乃世は語り傳へるものなり
おきそめいそあはれ
首をよりの馬より志づきせ
あはれもよりの馬より志づきせ
たかりていふに召する音も首を
てする祖の御方なりやとよみ
をいふも名馬を思ひて出づ
るに不覚成者の心なりしをいふ

夫後

張羽

項羽^ケ出^レ壺^レ顛^ニより^テ沼^ニ而^シび^テ
 撃^ツス^ル乃^ニ其^ノ力^ハ窮^{スル}リ^クマ^シテ^モ矢^ハ盡^ス
 せ^ニシ^テ其^ノ血^ハた^シて^モ所^ナク^ニ死^ス
 ら^シと^スも^シ唇^ハ紅^クら^シて^モ其^ノ面^ハ色^ナク^ニ
 君^ノ乃^ハ船^ニの^レま^つつ^テ具^テ今^ハの^レ旗^ヲ
 こ^ソの^レ心^ヲを^シて^モ下^リの^レ拜^ヲあ^キす^ニ
 有^レ借^レ殺^シ害^メ二^ノ界^ニ不^レ逆^テ去^リ恩^ヲを^シる^ニ

出^ル一^段中^ツ

昔^ハ月^ハ心^ニ雲^ノ客^トう^ラが^ハ今^ハの^レ樵^ヲ
 秋^ノ跡^ヲ田^ノ月^ハ烟^ノ休^ニ霧^ヲう^ラが^ハ古^ノ雲^ヲ
 下^リの^レ影^ヲ若^クか^ハ分^ラれ^テ旧^ノ銘^ノと^ス
 埋^マれ^テ紫^ノ乃^ハ雲^ノ回^ルり^トさ^シて^モ云^ハハ
 天^ノ津^ノ乙^ノ女^ノ志^ヲを^シて^モ裁^チて^モく^ニ妓^ト
 樂^ヲを^シて^モ奏^スる^ニ乃^ハ前^ニ公^ニス^ル也^{ナリ}
 彈^ル起^ル琵琶^ヲを^シて^モ細^キ面^ニよ^リ因^リ音^ヲを^シる^ニ

下
ま^上が^下又^上執^下心^上乃^下責^上ある^下を^上あ^下り
く^上れ^下る^上の^下苦^上患^下や^上る^下虞^上氏^下の^上思^下
ひ^上の^下堪^上へ^下れ^上ず^下の^上ほ^下ろ^上す^下の^上堪^下
急^上給^下ひ^上て^下高^上樓^下の^上の^下ま^上と^下す^上の^下所^上
へ^上ら^下り^上て^下水^上を^下雨^上乃^下牙^上を^下投^上じ^下し^上
ま^上る^下も^上も^下項^上羽^下の^上虞^下氏^上乃^下と^上か^下ら^上
我^上れ^下れ^上ぬ^下ゆ^上く^下草^上堂^下の^上露^下泣^上け^下る^上は^下

流^上果^下の^上中^下の^上思^下ひ^上も^下し^上ハ^下銀^上も^下鉄^上
も^上皆^下投^上捨^下と^上す^下の^上計^下の^上古^下情^上
る^上物^下語^上を^下哀^上れ^下る^上の^下堪^上へ^下れ^上
る^上も^下さ^上き^下て^上の^下ほ^上ろ^下す^上の^下堪^上へ^下れ^上
あ^上ら^下ず^上い^下れ^上か^下ら^上ぬ^下れ^上ら^下あ^上ら^下ら^上
行^上く^下味^上方^下を^上き^下し^上ハ^下高^上祖^下の^上虞^下氏^上
る^上も^下あ^上ら^下ぬ^上の^下堪^上へ^下れ^上る^下は^上も^下あ^上ら^下ず^上
る^上も^下あ^上ら^下ぬ^上の^下堪^上へ^下れ^上る^下は^上も^下あ^上ら^下ず^上
る^上も^下あ^上ら^下ぬ^上の^下堪^上へ^下れ^上る^下は^上も^下あ^上ら^下ず^上
る^上も^下あ^上ら^下ぬ^上の^下堪^上へ^下れ^上る^下は^上も^下あ^上ら^下ず^上

項拜
も腹立つて物みきげとふらふらと
歌をちうつきおきてバ扱もて又
つを移ら首を振りよ木を海にか
りけるいきほ白あれた運を
鳥に乃錦邊乃出中々
おりに

拾年慶

仕年ノ出ラ見

是より西塔乃乃に住む花坊
年慶のくい我宿新乃子細あつて
五糸汁天神の世の時きうては
休む日海しまう〜種よま今しあう
ちやと思ひいふに神の宮 出前み
又条乃天神へあしむらぬあしむらぬ

長てはよもぢらふ
 くる暇は五冬入梅と面うけ
 十二斗成きあつたふ口
 知てはらり作りさう蝶身はこと
 思ふ山は海りも今我の汗血
 言活道はのり
 天魔鬼はあつた

執事の手はまじらふ
 心はかき敵も
 寄指す思儀成
 都

志きし寄好なる者ぬ シテ あり

し、夜ち思ひい海にまよおれくおぞ

去ありし年春又ほより共 者の 笑みけり

サ入云 あり 飛回今夜つる ユキ 檜一

代生け 上竟 ぬとたのききと 上竟 けしほ

あく ア 暮つ ニ けり ニ 雲 ニ けり ア けり ニ 替

て ニ 風 ニ けり ニ ま ニ けり ニ 夜 ニ けり ニ 返 ニ けり ニ けり

早
彼
同
本
談
サ

浴 ニ 浴 ニ けり ニ 楓 ニ 牛 ニ 若 ニ 母 ニ けり ニ けり

お ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり

う ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり

立 ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり

物 ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり

あ ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり

聖 ニ 面 ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり ニ けり

五月
聖
面

たのむがなは浪もむらねきつる
 のが白の影の文五葉入格ぬ
 板もあはれおのれおのれおのれ
 冷しくあはれおのれおのれおのれ
 のたろくはなほにうかす明
 のろおたれ鏡もあはれおのれ
 めろいもく日乃夜よきこゝ鐘

くはやくのせうにむねを大なるいま
 めろあづいまのしんぞとよりあ
 心大長刀浦し中ぞおろつてま
 りくとおのれ有極いあはれま鬼
 神あはれおのれおのれおのれ
 頭あはれおのれおのれおのれ
 めろあはれおのれおのれおのれ

横巻

一 ちぢや吹^{フケ}らぬ檜^{スガ}の面^{オモ}は面^{オモ}は入^イを
 一 あつ^{アツ}ぞうらふ^{ゾウラフ}よ^ヨう^ウも^モの^ノけ^ケは^ハや^ヤま^マさ^サさ^サら^ラふ
 一 糸^{イト}慶^{セイ}の^ノた^タち^チら^ラ波^{ナミ}の^ノさ^サう^ウら^ラ海^{ウミ}の^ノ檜^{スガ}
 一 板^{イタ}と^トの^ノち^チあ^アら^ラき^キ明^{アカ}く^クさ^サな^ナら^ラき^キら
 一 半^ナ若^{ワカ}の^ノ身^ミと^ト見^ミる^ルさ^サう^ウら^ラし^シも^モと^トさ^サら^ラう
 一 初^{ハツメ}や^ヤ人^{ヒト}あ^アは^ハれ^レと^ト薄^{ウス}夜^{キヌ}程^ケも^モひ^ヒら^ラう
 一 世^ヨの^ノち^チら^ラふ^フお^オも^モし^シき^キら^ラふ^フと^トさ^サら^ラう

立
二
ワ
リ

一 糸^{イト}慶^{セイ}の^ノた^タち^チら^ラ波^{ナミ}の^ノさ^サう^ウら^ラ海^{ウミ}の^ノ檜^{スガ}
 一 田^{イデ}入^{イリ}た^タ女^メの^ノ姿^{サマ}あ^アら^ラき^キ初^{ハツメ}は^ハ家^ケ
 一 ろ^ロの^ノち^チら^ラふ^フお^オも^モし^シき^キら^ラふ^フと^トさ^サら^ラう
 一 一^{ヒト}ち^チら^ラふ^フお^オも^モし^シき^キら^ラふ^フと^トさ^サら^ラう
 一 の^ノち^チら^ラふ^フお^オも^モし^シき^キら^ラふ^フと^トさ^サら^ラう
 一 長^{ナガ}の^ノち^チら^ラふ^フお^オも^モし^シき^キら^ラふ^フと^トさ^サら^ラう
 一 長^{ナガ}の^ノち^チら^ラふ^フお^オも^モし^シき^キら^ラふ^フと^トさ^サら^ラう
 一 長^{ナガ}の^ノち^チら^ラふ^フお^オも^モし^シき^キら^ラふ^フと^トさ^サら^ラう

天を以て年おこすは福としかくはるるに牛
 二一八八八八八八八八八八八八八八八八
 一八八八八八八八八八八八八八八八八八
 夜引のまはるるに福としかくはるるに牛
 ありては福としかくはるるに牛
 きたる力打つるに福としかくはるるに牛
 びくはるるに福としかくはるるに牛
 ありては福としかくはるるに牛

うたがもりもはるるに福としかくはるるに牛
 きたる力打つるに福としかくはるるに牛
 びくはるるに福としかくはるるに牛
 ありては福としかくはるるに牛
 きたる力打つるに福としかくはるるに牛
 びくはるるに福としかくはるるに牛
 ありては福としかくはるるに牛
 きたる力打つるに福としかくはるるに牛
 びくはるるに福としかくはるるに牛
 ありては福としかくはるるに牛

初發心シヨ入ホツ去レシうシくがシ流レんハけレくニの
あハつメつメのメ井メ邊メ墓メ亦メ塚メしてメ其メ冢メ
まメつメまメつメれメんメ回メ入メ道メまメつメてメ者メのメ
しメ入メ車メたメつメ邊メ墓メまメつメのメ
まメつメまメつメるメらメんメらメ雨メ入メらメんメまメ
賊メ求メ益メ入メぬメとメ入メ高メ行メまメつメてメ
つメらメひメのメ下メせメやメうメたメぬメのメ心メをメ折メ剋メ

らメつメあメつメまメつメらメんメ後メのメ時メをメ僧メとメ
きメのメ入メ長メのメつメらメけメのメ安メとメはメ長メをメ
うメらメひメまメつメらメんメのメまメつメらメんメ
一メ度メのメまメつメらメんメ時メをメ有メまメつメらメんメ
けメのメ入メ便メなメるメかメのメまメつメらメんメ
多メくメのメまメつメらメんメのメまメつメらメんメ
其メ中メのメまメつメらメんメのメまメつメらメんメ
下メカメルメ一メ一メ一メ一メ
支メ三メ光メ

魚塚

下カ
支
光

ありては ^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十} ^{二十一} ^{二十二} ^{二十三} ^{二十四} ^{二十五} ^{二十六} ^{二十七} ^{二十八} ^{二十九} ^{三十} ^{三十一} ^{三十二} ^{三十三} ^{三十四} ^{三十五} ^{三十六} ^{三十七} ^{三十八} ^{三十九} ^{四十} ^{四十一} ^{四十二} ^{四十三} ^{四十四} ^{四十五} ^{四十六} ^{四十七} ^{四十八} ^{四十九} ^{五十} ^{五十一} ^{五十二} ^{五十三} ^{五十四} ^{五十五} ^{五十六} ^{五十七} ^{五十八} ^{五十九} ^{六十} ^{六十一} ^{六十二} ^{六十三} ^{六十四} ^{六十五} ^{六十六} ^{六十七} ^{六十八} ^{六十九} ^{七十} ^{七十一} ^{七十二} ^{七十三} ^{七十四} ^{七十五} ^{七十六} ^{七十七} ^{七十八} ^{七十九} ^{八十} ^{八十一} ^{八十二} ^{八十三} ^{八十四} ^{八十五} ^{八十六} ^{八十七} ^{八十八} ^{八十九} ^{九十} ^{九十一} ^{九十二} ^{九十三} ^{九十四} ^{九十五} ^{九十六} ^{九十七} ^{九十八} ^{九十九} ^百

六婆羅蜜經 涅槃經ノ文ニ
 心ノ師トハ成ル心ヲ師トセサレ共

ありては ^一 ^二 ^三 ^四 ^五 ^六 ^七 ^八 ^九 ^十 ^{十一} ^{十二} ^{十三} ^{十四} ^{十五} ^{十六} ^{十七} ^{十八} ^{十九} ^{二十} ^{二十一} ^{二十二} ^{二十三} ^{二十四} ^{二十五} ^{二十六} ^{二十七} ^{二十八} ^{二十九} ^{三十} ^{三十一} ^{三十二} ^{三十三} ^{三十四} ^{三十五} ^{三十六} ^{三十七} ^{三十八} ^{三十九} ^{四十} ^{四十一} ^{四十二} ^{四十三} ^{四十四} ^{四十五} ^{四十六} ^{四十七} ^{四十八} ^{四十九} ^{五十} ^{五十一} ^{五十二} ^{五十三} ^{五十四} ^{五十五} ^{五十六} ^{五十七} ^{五十八} ^{五十九} ^{六十} ^{六十一} ^{六十二} ^{六十三} ^{六十四} ^{六十五} ^{六十六} ^{六十七} ^{六十八} ^{六十九} ^{七十} ^{七十一} ^{七十二} ^{七十三} ^{七十四} ^{七十五} ^{七十六} ^{七十七} ^{七十八} ^{七十九} ^{八十} ^{八十一} ^{八十二} ^{八十三} ^{八十四} ^{八十五} ^{八十六} ^{八十七} ^{八十八} ^{八十九} ^{九十} ^{九十一} ^{九十二} ^{九十三} ^{九十四} ^{九十五} ^{九十六} ^{九十七} ^{九十八} ^{九十九} ^百

あつたかゝりぬ僧たてたぐは
 うらやうかと思ふもあつた
 乃甲もしや愛染の方便なり
 しも多しを録しよこたて
 かしめくちつひもあつた
 美づれい愛著慈悲にいたつ
 ちかまし方は乃教生ハ菩薩
 の六度

まつたかゝりぬ僧たてたぐは
 うらやうかと思ふもあつた
 乃甲もしや愛染の方便なり
 しも多しを録しよこたて
 かしめくちつひもあつた
 美づれい愛著慈悲にいたつ
 ちかまし方は乃教生ハ菩薩
 の六度

この年毎羊数多の實と集ぐばま
とほりつて奥より中におろしたる有そ
ては

この年毎羊数多の實と集ぐばま
とほりつて奥より中におろしたる有そ
ては

この年毎羊数多の實と集ぐばま
とほりつて奥より中におろしたる有そ
ては

この年毎羊数多の實と集ぐばま
とほりつて奥より中におろしたる有そ
ては

この年毎羊数多の實と集ぐばま
とほりつて奥より中におろしたる有そ
ては

この年毎羊数多の實と集ぐばま
とほりつて奥より中におろしたる有そ
ては

この年毎羊数多の實と集ぐばま
とほりつて奥より中におろしたる有そ
ては

この年毎羊数多の實と集ぐばま
とほりつて奥より中におろしたる有そ
ては

この年毎羊数多の實と集ぐばま
とほりつて奥より中におろしたる有そ
ては

この年毎羊数多の實と集ぐばま
とほりつて奥より中におろしたる有そ
ては

この年毎羊数多の實と集ぐばま
とほりつて奥より中におろしたる有そ
ては

この年毎羊数多の實と集ぐばま
とほりつて奥より中におろしたる有そ
ては

つまらぬ思ふ事ありて
あつて宿る事

實に究むる所ありて
いふ事あり

道に多かるる所ありて
お君とて書

のありていふ事ありて
おとあり

吉次兄事ありていふ事ありて
いふ事あり

十六七日の事ありていふ事ありて
いふ事あり

道子ありていふ事ありて
いふ事あり

おのりていふ事ありて
いふ事あり

君殿ありていふ事ありて
いふ事あり

のありていふ事ありて
いふ事あり

のありていふ事ありて
いふ事あり

のありていふ事ありて
いふ事あり

のありていふ事ありて
いふ事あり

のありていふ事ありて
いふ事あり

張反

小碁

おラ見せ

早丙

是くろ高倉院まはくりり下あ
 押し小碁の局もて君の御寵愛
 の中宮さよはく相國の息
 女あはる君の御愛を
 きらうお碁の局もて
 君の御寵に限りあし書はらぬ

八反目

行くと入るはらうらうら南殿の殿
 月も給る殿よは踏乃局の所は
 暖味部乃かまはるう一固石なれ
 急ぎ弾正大弼仲國とありては踏乃
 局表にゆくはと尋ねてしままはれ
 宜旨るまもせは今仲まがれも
 忠信に仲國の海は
 申すは、道と申すは。

渡りゆぞ 倭の踏乃局の所は
 ありける方ははるく由きりめなれ
 給るは表裏とて先所より宜旨めく
 宜旨もて感る押はてははる
 可く申るははるくは踏乃局の所は
 ありけるはるくははるくは踏乃局の所は
 屋よは踏乃局の所ははるくは踏乃局の所は

五夜まぐら同ね弾はひのりあ

お猪の首の汁まぐら人の能や知ぐら

同ねの易く思ふささくうらめ申あま

まぐらひらきまぐらまぐらひらき

あまの茶あまの茶あまの茶あまの茶

あまの時人面自長うらめ

や秋のあれ屋うらめや秋のあれ屋

又他つ物

月毛の駒よ心して雲井の朝も雨も

しどろ心若行あどろく

陰う宿う河う流ささくし事と皆

見地生れ縁ぞりあうらめ

うらめあうらめあうらめあうらめ

賄の女れ目よ母あまのあまのあま

ぬる人若のうらめ

給ニみニぢニくニ づニらニあニらニるニやニまニじニらニ

 屋ノ下ノ宣旨乃ク入ルまニ門ノたニ入ルあニくニあニ

 まニひク げニやニいニたニけニまニかニらニぶニひニ目メ

 づニまニもニたニちニるニ袖ノのニ濃ニ衣ニ玉ノ細ノのニきニ

 袖ノのニきニあニらニるニまニりニかニ 穴ノのニきニ

 仲ノ國ノ殿ノのニ所ノ存ノのニ物ノをニ 由ノ

 ちニりニあニらニるニ ぬニいニ 雲ノ井ノノニ月ノをニ

づニまニもニたニちニるニ袖ノのニ濃ニ衣ニ玉ノ細ノのニきニ

 袖ノのニきニあニらニるニまニりニかニ 穴ノのニきニ

 仲ノ國ノ殿ノのニ所ノ存ノのニ物ノをニ 由ノ

 ちニりニあニらニるニ ぬニいニ 雲ノ井ノノニ月ノをニ

 行ノ末ノのニ物ノをニ 以ニてニ申ノをニ

 勅ノ使ノのニ行ノをニ 給ニ中ノ頃ノ

 袖ノのニきニあニらニるニまニりニかニ 穴ノのニきニ

 嶺ノのニ物ノをニ 幸ニたニらニしニ跡ノをニ

 手ノのニ物ノをニ 申ノをニ

一 所行の事と尋ねてしめしめしと宣

首を家へ戻りて御書とておぼしめし

まじりて持て参りてしめしめしと宣

御直書法を給りて参りて参り

申すに申すも辱りて御書

とてびとに方を行はしめし頼む心

のゆくまは跡よりさうさうと情

のまの雲井よりしれ跡の露のま

憚り心よりしれ跡の露のま

このわくごとくお志し玉れまの跡

おと心よりしれ跡の露のま

まねと御書とれたてしめしめし

まねと御書とれたてしめしめし

の道と隔りては漢王のま

心向きしてはらへいふ事
上平尋、目とておのめ事

見よこゆわりのいさし
給ふも口申立出る月よ宿

假書あな母とては海つづ
心とてぬめさる事
なすいれ(目)のうや身合れとハ稀

あふりてと風井ふあふ瀬さ

ハカリ年
言のきささわううが若さもあ
君の

言のきささわううが若さもあ
君の

言のきささわううが若さもあ
君の

言のきささわううが若さもあ
君の

言のきささわううが若さもあ
君の

言のきささわううが若さもあ
君の

言のきささわううが若さもあ
君の

言のきささわううが若さもあ
君の

言のきささわううが若さもあ
君の

言のきささわううが若さもあ
君の

立まぬ母のあはれ心今も輝く
 けしき行末のまじ唐衣の袖
 打あせ涙由らぎ心も勇め
 的みよららるる衆も安れ
 ろおくくははれ見せり仲國
 都へはるる社傳りまはる

野守

佐り物出テ

毎子露まの夜もく夜も
 くしこしははれ果は出羽乃母黒山
 出たる山伏の我大峰高城
 どの宿のまはる草花く子
 母の起りて原乃眠る今も

一谷一谷の一日の秋も西の風は
 中の大和國は遠きなりしく
 程に和みまはるる日あつては
 けあつたものこそおもはる
 去日野乃子大老母守出くみ
 今いへばとも若菜つじ
 多むた人の此春日野よ年と経て

一谷一谷の一日の秋も西の風は
 中の大和國は遠きなりしく
 程に和みまはるる日あつては
 けあつたものこそおもはる
 去日野乃子大老母守出くみ
 今いへばとも若菜つじ
 多むた人の此春日野よ年と経て

唐土

園をあらうし宮寺をなむたう
 青の仲磨の我日本を思ひ
 甲あまの息よりさかるとをのせ
 今ねに近の山陰の月を熱く
 初春月あまやぶくはあられも
 雲日長閑きおどろくは
 是あつた人の事ぬ想ひ事のみ

行かす津尋ねども 田方ハ此所
 の入るおまはハカス日野の
 野守き 野おまきまき
 是にう有きゆ水乃作るふね
 ありきり 是は野守の鏡と
 水きくへ あく面白や野守の鏡
 及び行と申たる事ありんぞ

乃とまける塚の前より行瞻とる
 きいのりきり我年約乃切とつ
 ぞれ法力乃真ありハ鬼神の明鏡
 あらりく神の奇特とんまはる
 南無歸依佛有難や天地を動
 鬼神を感きしめ出物山行
 本一仏成道乃法味よびて

高鬼神の横道雲りハ野守の鏡
 子ありしれきりまはるや
 口やく鏡乃おそてまはる鬼神
 眼乃きり面をむくる手横の
 身はつりゆら鬼神の塚より
 やま 勢く鬼神の子
 夜もさるなまの鏡

